

韓国の先進図書館がいま目指すもの：その現状と方向性に関する調査分析

工藤，絵理子
九州大学附属図書館e リソースサービス室リポジトリ係

大田，海
九州大学附属図書館利用支援課文献流通サービス係

兵藤，健志
九州大学附属図書館e リソースサービス室e リソースサポート係

馬場，謙介
九州大学附属図書館研究開発室

他

<https://doi.org/10.15017/20106>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報．2010/2011，pp.19-26，2011-08．九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

韓国の先進図書館がいま目指すもの —その現状と方向性に関する調査分析—

工藤 絵理子[†], 大田 海[‡], 兵藤 健志[§], 馬場 謙介^{**}, 南 俊朗^{††}

<抄録>

近年の韓国における図書館の発展はめざましい。我々はその理由を求めて2011年3月、大学図書館を中心に韓国の先進的図書館に対する訪問調査を実施した。本稿では、特に研究支援・学習支援・知識情報基盤という観点から、ソウル大学校図書館、釜山大学校図書館、延世大学校図書館、国立デジタル図書館の先進的な情報設備やサービスについて詳しく分析した。その結果、国際競争力強化という国家戦略の実現に向けて、これらの図書館は、自らの評価だけではなく、その所属する大学、その国民の評価をも引き上げることを目的に先進的機能を実現していることが分かった。

<キーワード> ソウル大学校図書館、釜山大学校図書館、延世大学校図書館、国立デジタル図書館、研究支援、学習支援、知識情報基盤

The Cutting-Edge Libraries in Korea —An Analysis on their Current Situation and Future Perspectives—

Eriko KUDO, Umi OTA, Kenshi HYODO, Kensuke BABA and Toshiro MINAMI

1. はじめに

近年の韓国における図書館の発展はめざましく、大学図書館もその例外ではない。我々はその社会的背景や現状を調査し、発展の要因を探るため2011年3月22日から25日まで、韓国の先進事例と目される大学図書館および国立中央図書館、デジタル図書館を訪問した。今回の調査によって、参考となる設備や政策を多く学び、また、今後の図書館のあり方に関する示唆を受けた。

1.1. なぜ韓国の図書館なのか

IT先進国である韓国では、知識情報基盤の土台としての図書館の進化がめざましい。図書館の発展の背景には主に以下の2点があげられる。

1) 2000年以降の政府主導による図書館整備・情報化の推進

当時の金大中政権は、自らを「国民の政府」と名付け、国民の情報格差を是正する知識基盤社会の構築を当面の政策課題として打ち出した。知識情報資源を体系的に整備するための法律（知識情報資源管理法）が施行され、様々な分野の情報システムが構築され、デ

ジタル資料の提供が進んだ^{[1][2]}。

さらに、2006年には大統領直属の図書館情報政策委員会が設置され、国家的な知識情報基盤整備の一環として図書館施策が実施されてきた^[3]。国家事業としてIT分野の育成を掲げ、また情報化社会の推進を図ることにより先進国の地位を築いてきた韓国において、図書館は、情報化政策の中心を担う機関として、その存在が重要視されている。

2) 大学評価システムと大学ランキング

大学評価先進国として、韓国では早くから大学評価システムが導入されてきたが、2008年から2009年にかけて、李明博政権は高等教育機関の国際競争力を促すため、当該システムの一大改革を行った。韓国大学教育協議会により実施されていた既存の大学総合評価認定制の代わりに、自己評価制と情報公示制を導入し、毎年55項目からなる情報を政府の管理するWebサイトで公開することとした^{[4][5]}。その項目の中には図書館に関するものも含まれており、図書館の充実が大学評価の判断材料の一つとなっていることが窺われる。また、政府主導との批判もあるが、この改革により、大学に自立性が与えられたこと、情報の公開が義務づ

[†] くどう えりこ 九州大学附属図書館eリソースサービス室リポジトリ係 E-mail: kudoe@lib.kyushu-u.ac.jp

[‡] おおた うみ 九州大学附属図書館利用支援課文献流通サービス係 E-mail: umiohta@lib.kyushu-u.ac.jp

[§] ひょうどう けんし 九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係 E-mail: kenshi@lib.kyushu-u.ac.jp

^{**} ばば けんすけ 九州大学附属図書館研究開発室 E-mail: baba@lib.kyushu-u.ac.jp

^{††} みなみ としろう 九州大学附属図書館研究開発室 E-mail: minami@lib.kyushu-u.ac.jp

けられたことは、大学が評価向上に熱心に取り組むきっかけとなった。

さらに、韓国での大学ランキングの影響力がこの評価システムの重要性に拍車をかけている^[6]。もともとランキングが好きな国民性に加え、大学進学率が約 9 割と、日本よりも先に大学全入時代を迎えて大学間競争が激化している。この大学評価システムの結果が、国内の各種大学ランキングに直結している。

このような状況において、大学の一部署である図書館も、大学評価に大きく貢献することが大学内部から強く求められている。

1.2. 調査対象図書館

前節で述べた図書館発展の背景をふまえ、調査対象として以下の図書館を選定した。

1) 韓国の高等教育を牽引するソウル大学校図書館

ソウル大学校は 1946 年に創立された、学部生 16,000 人、大学院生 10,000 人を抱える韓国最高峰の国立大学である^[7]。最高水準の研究を支援するために図書館がどのようなサービスを提供しているかを調査した。

2) 大学間競争に最も晒されている地方国立総合大学の一つである釜山大学校図書館

釜山大学校は 1946 年に創立された、学部生 21,000 人、大学院生 7,700 人を抱える国立総合大学である^[8]。大学間競争に最も晒されている地方総合大学の図書館として非常に特色ある研究支援サービスを提供しているため、調査先として選定した。

3) 主要私立大学の一つである延世大学校図書館

延世大学校は 1885 年に創立された、学部生 22,000 人、大学院生 6,400 人を抱える韓国有数の私立大学である^[9]。2008 年にサムスンからの 300 億ウォン（総工費の半分）の寄附を元に建設された図書館新館(Yonsei Samsun Library)を訪問した。先進的な IT 技術を駆使してどのようなサービス空間を利用者に提供しているのかを調査した。

4) 国家的な図書館政策に直に触れられる国立デジタル図書館

韓国政府は情報化社会の推進を図るため、新しい情報通信技術およびインフラを積極的に導入してきた。2009 年に建設された国立デジタル図書館もその情報インフラの一つである^[10]。今後の急速な増加が予想される電子的資源を提供するために、国家としてどのような理念のもと、どのような図書館設備を整備しているのかを調査した。

2. 調査報告

2.1. ソウル大学校図書館

ソウル大学校の図書館は、近年の IT 技術の進歩をいち早く取り入れて、積極的に研究者支援を行っている。本節では、特に相互利用と研究支援サービスに着目して分析する。

1) 相互利用

中央図書館の所蔵資料は、大学院生と教員を対象に Online Article Delivery Service^[11]を提供している。このサービスを利用することで、依頼者は来館することなく、図書館資料を閲覧できる。料金は 10 ページ以内の場合は、1,000 ウォン（約 70 円）、それを超える分は 1 ページにつき 100 ウォン加算される。Web からのみ申込可能で、依頼者は MyLibrary のページで依頼した論文を閲覧できる。一定期間を過ぎると論文は削除される仕組みになっている。支払いはクレジットカードからの引き落としにより、オンラインで行うことができる。提供は迅速で、48 時間以内には資料を閲覧できる。

学内に所蔵がない資料は、国内では KERIS, KORSa, NDSL から文献複写の提供を受けている。また、4 大学と相互貸借の提携を結んでいる。海外の協力機関は、OCLC（全世界）、Subito（ドイツ）、NII（日本）、国立国会図書館（日本）、CALIS（中国）である。日本では、業務担当者が NACSIS-ILL システムを通して、他大学へ依頼をしているが、韓国では KERIS, KORSa の Web ページから依頼者が直接他大学へ依頼することができる。フルテキストへのリンクもあり、利用者にとって利便性が高い。

日本への依頼について業務担当者にインタビューした。それによると NII（KERIS-NACSIS 間システム）への依頼と NDL への依頼に関してシステム面でどちらか一方が使いやすいなどの差異はないが、NII には文献複写を NDL には貸借を依頼することが比較的多いとのことであった。また、NII に関しては、依頼できる資料が、国内発行のものに限られていること、また資料の図書館間のやりとりが郵送のみで電子的に出来ないことを残念に思っているとの意見が聞かれた。

文献複写相互利用統計（図 1）によると、依頼は減少傾向にあり、受付は増加傾向にある。依頼が減少しているのは、機関リポジトリによる論文の公開や電子ジャーナルの増加などの要因があるものと見られる。受付増加に関しては、ソウル大学校は自然科学分野に関する韓国内でのセンター館として指定されており、該当雑誌の複写を無料で提供していることが、その大

きな理由であろう。

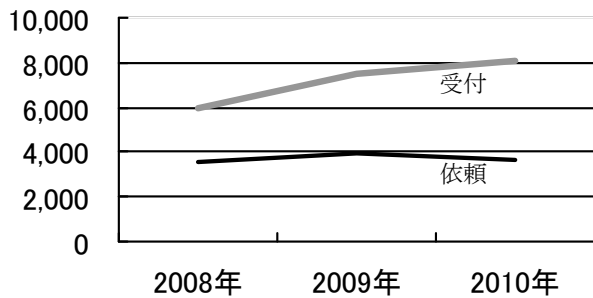


図1 文献複写相互利用統計（ソウル大学校）

2) 研究支援サービス

韓国の大学図書館では、近年サブジェクト・ライブラリアンの育成に力を入れている。ソウル大学校図書館では、2007年2月に館長主導のもと研究支援室を設置した。その設置は、ソウル大学校の大学評価向上へ図書館側から貢献し、学内での図書館の地位を確立することと、世界の図書館のなかでその存在感を増すことを目的としている。後述する延世大学校でも、2007年より同様のサービスを開始している^{[12][13]}。

ソウル大学校図書館の研究支援室は、講義・研究のサポートとともに情報開発支援も行う。5つの分野をそれぞれ2名のサブジェクト・ライブラリアンが担当している。米国のサブジェクト・ライブラリアンとは異なり、採用された担当者はその分野の専門家とは限らない。配属後に、専門分野を勉強したり、講座を受講したりして、知識を深めている。また、図書館でのセミナーの開催や、外国の大学図書館の調査など積極的に研修の機会を設けている。

研究支援室では、研究室訪問サービス^[14]も行っており、教員に専門分野の最新動向を提供するとともに、教員から図書館に対する要望を収集している。このサービスには、図書館の広報活動をダイレクトに行えるという利点もある。研究支援室への需要は年々増えてきており、教員へのアンケート結果などから図書館に対する期待度・満足度向上に貢献していることが分かっている。

2.2. 釜山大学校図書館

優れた研究支援を行う韓国の大学図書館の中においてもとりわけ注目すべきは、釜山大学校図書館のSCIサービスである。このサービスは韓国の大学図書館では初めての試みである。今後の大学図書館の方向性を示唆する事例として、SCIサービスに重点を置いて調査した。

1) SCI サービスとは

SCI サービスとは、SCI (Science Citation Index) に採録された論文群を計量書誌学(Bibliometrics)的に分析し、そこから得られる情報を研究者や大学経営陣に提供するサービスである。SCI のデータ分析から得られる情報には、論文発表数や平均被引用回数の推移など大学の研究業績評価に資するものが多い。そのため、日本の大学では、研究戦略立案の一環としてこのような分析を担当する部署を大学の中枢部に設ける傾向が強まっている。

評価指標に敏感な韓国の大学においては、なおさらSCI のデータ分析に傾注するのではないかと推測される。釜山大学校においてはその役割を図書館が担っており、それは感嘆に値する。日本の大学でも韓国の大学でも、図書館が正式なサービスとして、研究動向や研究業績などを独自に分析しているといった事例は他に見当たらない。

2) SCI サービスの内容

SCI サービスの実態について釜山大学校図書館の担当者にヒアリングを行った。その内容のまとめを表1に示す。

表1 SCI サービス

概要	SCI のデータ分析から得られる情報を大学経営陣や研究者へ定期的に提供。
開始年	2008 年
体制	担当職員 3 名 SCI サービスのための予算も毎年獲得
使用データベース	Web of Science, JCR (Journal Citation Report), NCR Korea (National Citation Report for Korea)
情報提供媒体	冊子体の報告書（数年に一度） 特設ウェブサイト（随時情報更新）

SCI サービスは正式には2008年から始まった。それ以前は図書館と並行して大学事務局にも同様の研究動向分析を実施している部署があった。しかし、提供される情報の質について図書館の方が優れていたという理由により、図書館が専門的に行うサービスとなったそうである。

SCI サービスには3名の職員が従事している。3名とも図書館専任の司書であり、SCI サービス以外の業務も兼務している。いずれも計量書誌学の専門家ではないが、1名はレファレンス担当の職員も含まれており、分析に使用するデータベースについて詳しい知識を持ち合わせている。

分析結果は冊子体の報告書^[15]と特設ウェブサイト^[16]により公開されている。提供情報の具体的な内容は

表2の通りである。なお、冊子体の報告書に関しては2010年発行のものを参考にした。

表2 SCI サービス提供情報

媒体	提供情報
冊子体 報告書	・全世界の分析 国家別論文数／主要大学別論文数／Impact Factor 上位学術雑誌／分野別論文数 ・韓国内の分析 分野別論文増加率／主要大学の分野別論文数／Impact Factor の高い韓国発行学術雑誌 ・釜山大学校の分析 共著状況／被引用回数上位論文／学部別論文発表状況
特設ウ ェブサ イト	・学部別の研究動向（速報） ・釜山大学校研究者の論文で SCI にインデックスされたもの（週次） ・学術雑誌 Impact Factor 情報（独自の検索プラットフォーム提供） ・学科別学術雑誌の平均 Impact Factor ・SCI への新規採録誌や脱落誌の情報

報告書は200ページ以上にも及ぶ詳細なデータ分析であり、釜山大学校の状況だけでなく、全世界や韓国内の動向も網羅している。また、釜山大学校内の分析では、学部別の状況を含んでいるが、もともとなるSCIのデータは学部の情報をほとんど含んでいない。そのため、学部別の把握には相当な労力を費やしたであろうと考えられる。

冊子体の発行は数年に一度に限られるため、最新情報の発信はウェブサイトにより補っている。図書館ウェブサイトの中の一部としてページを設けるのではなく、SCI サービスだけの特設ウェブサイトを作成している。ウェブサイトのデザインや内容的な充実度からはこのサービスが重要な事業に位置付けられていることが窺われる。

以上が釜山大学校のSCIサービスの概要である。図書館の実力といえはその設備や所蔵資料や電子的サービスに目を奪われがちであるが、SCI サービスではデータの分析を行う人的資源が最も重要である。この意味から、図書館員の能力を外部に認めさせるサービスとして大変意義深い。

2.3. 延世大学校図書館(新館)

延世大学校の図書館新館のコンセプトは「最先端のIT設備とそれらに容易にアクセスできるユビキタス環境を備えた図書館」である。図書館職員による、数年に及ぶ海外の図書館調査等を経て確立したこのコンセプトは、最高の図書館インフラとそれにふさわしいサービスを利用者に提供することを目指している。具

体的には、図書館空間を以下の3つに分割して機能させている。

1) ユビキタス・ライブラリー

延世大学校図書館でまず目に入るのは、エントランスを中心とした U-Lounge とよばれる空間であり、地下1階から地上1階にわたるインフォメーションコモンズである。ここにはタッチパネル式大型ディスプレイ（写真1）が並ぶ。

このディスプレイによって利用者は各自のニーズに合わせて様々な情報コンテンツにアクセスできる。たとえば、利用案内やキャンパスマップを含めた広報画像による案内情報や、図書館員の推薦図書紹介サイトを見ることができる。また1,100を超える国内外の新聞閲覧サイトといった学術情報コンテンツから、アルバイト情報や学生同士の伝言板として使えるメモボードやゲームまで備えられている。



写真1 延世大学校図書館 タッチパネル式ディスプレイ

2) カルチュラル・ライブラリー

2階には、マルチメディアセンターが広がる。映画や語学学習教材といったコンテンツを視聴する各種プレーヤーを備えたメディア視聴室に留まらず、コンテンツを自らが制作できる機材を備えたメディア制作室も備えられている。メディア制作室の整備には、実際にコンテンツを制作することで、利用者のメディアに対する理解をより深めることができるという考えが込められている。

メディア視聴室の一角には、マルチメディア編集コーナー（写真2）がある。そこには2台の Final Cut Pro と、6台の Adobe Creative Suite CS3/Sony Vegasu ワークステーションが備えられており、利用者が自ら撮影したソースのキャプチャからDVD制作までを一貫して行う環境が整えられている。実際に作業を行っている熱心な学生の姿も見られ、日常的に利用されているこ

とが窺えた。



写真2 延世大学校図書館 マルチメディア編集コーナー

2階奥にあるメディア制作室(写真3)では、ブルーバックなどの高度な技術を用いて、照明・撮影・調整・編集といったメディア制作の全行程を利用者が直接行うことができ、職員からサポートを受けることも可能である。



写真3 延世大学校図書館 メディア制作室

3) コンビニエント・ライブラリー

利用者のあらゆる学習ニーズに応えるため、様々な学習閲覧室が備えられている。

まず、学生の課題遂行に必要なソフトウェアサポートPCとプリント/スキャンができる端末が、1階のインフォメーションコモンズに広がる。それに加えて3階にある自習室は、PCのない大机や個人用机のみが並ぶエリア、PC端末を備えたエリア、そしてノートPCを持ち込めるエリアと分かれている。5~6人向けのグループ学習室やプロジェクターなどを備えたプレゼンテーションルームもある。

こうして見てみると、2008年に開館した延世大学校

図書館新館の確固たる信念とその斬新さが、今なお図書館界に大きな衝撃を与えていることに驚く。当時の館長が新しい時代の図書館を建設することに熱心だったと聞いたが、そうした教員のコンセプトを吸収し、調査を重ねて実現した図書館職員の努力とスキルに感銘を受けた。

2.4. 国立デジタル図書館

2009年5月25日に開館した国立デジタル図書館(通称 library)は、建設費1,237億ウォン、建設期間7年(2002年~2008年)がかけられた巨大なプロジェクトであった。比較的裕福な住民が多いソウル市瑞草区に位置する国立中央図書館に併設され、その建物は連絡通路で国立中央図書館との行き来が可能となっている。延床面積38,014㎡の地上3F地下5Fだが、フロアの多くは保存書庫として使われており、実際に住民の利用空間として先進的な情報環境設備が整えられているのは地下2Fと地下3Fのみである。なお、本図書館の設計に当たっては国立国会図書館関西館を参考にしたとのことである。そう言われてみると全体の雰囲気がなんとなく似ているように感じられた。

1) デジタル資料閲覧空間

国立デジタル図書館の利用者空間を表3に整理した。

表3 国立デジタル図書館の空間

デジタル展示空間	・デジタルとアナログを組み合わせたアート空間
デジタル資料閲覧空間	・デジタル資料閲覧や文書編集作業が可能な空間 ・WindowsPC、大型モニター、3面モニター、プリンターなどの設備
マルチメディア資料閲覧空間	・CDやDVDなどマルチメディア資料を閲覧するための空間 ・個人で閲覧する空間とグループで閲覧する空間を用意
デジタル資料編集空間	・画像や映像コンテンツを編集するための空間 ・Adobe PhotoshopやIllustratorなどの編集ソフトウェアが利用可能
コンテンツ制作スタジオ空間	・映像スタジオ/音響スタジオ/UCCスタジオの3スタジオ ・照明機器、撮影機器、音響機器、編集機器を用いて本格的なコンテンツ制作が可能
セミナー空間	・グループで利用可能なミーティング空間

最も基本となるのはデジタル資料を閲覧するための空間(写真4)であろう。そこには、フロア一杯にPC設備が広がっており、デジタル資料の閲覧に供されている。PCを利用するためには予約をする必要があるが、

予約は自宅からインターネットで申し込みが可能である。1回の予約につき3時間まで占有できる。



写真4 国立デジタル図書館 デジタル資料閲覧空間

また、入館手続きや予約の必要が無いロビー空間にはデジタル新聞やデジタル雑誌が閲覧できるタッチパネル（写真5）も設置されている。



写真5 国立デジタル図書館 デジタル新聞タッチパネル

近年韓国では電子書籍の普及が進んでいる^[17]。2004年の国内電子書籍発行数2万5千タイトルであったのが2009年には10倍近い23万タイトルとなっている^[18]。国立図書館ではこれらの電子書籍を選択的に収集しているそうである。また、2009年3月には図書館法や著作権法が改正され、国立図書館によるウェブ上のオンラインコンテンツ収集が可能となった。そのため、図書館が提供するデジタル資料は今後ますます増加することが予測される。冊子体資料の閲覧空間だけでなく、国立デジタル図書館のようなデジタル資料の閲覧空間は他の公共図書館でも必須となるであろう。

2) コンテンツ制作空間

国立デジタル図書館の設備について感心するのは、

資料を閲覧するだけにとどまらず、そこで得られた情報素材を用いた作業までが考慮に入れられている点である。たとえば、PCのディスプレイとして大型モニターや3面マルチモニター（写真6）が接続されているのは、デジタル資料とメモを取るためのソフトウェアなどを同時に開いて作業しやすいようにという配慮からであろう。



写真6 国立デジタル図書館 3面モニター

それ以外にも、デジタル資料編集空間では、文書作成ソフトだけでなく、Adobe PhotoshopやIllustratorやFlash Proといった映像や画像の高度な編集ソフトウェアが提供されている。さらには、図書館内に本格的なスタジオ（写真7）までもが設置されており、住民は予約をすれば、このスタジオを利用して、あたかもテレビやラジオのプログラムのようなコンテンツを収録することが可能である。



写真7 国立デジタル図書館 UCCスタジオ

以上、国立デジタル図書館の設備を簡単に紹介した。デジタル資料の普及や情報通信技術の発展に伴って、図書館も変化しなければならないが、その中で国立デ

デジタル図書館は、圧倒的な先端設備により存在価値を高めている好例だと考えられる。単なるコンテンツの閲覧空間ではなく、国民が新たなコンテンツを生み出すという創造的な空間である点にデジタル時代に適合した国民を養成するという意図が感じられ、その具体例として非常に参考になる。

3. まとめ

以上の調査を通して、韓国の図書館、特に大学図書館における研究支援および学習支援に特徴的な動向を見出せた。すなわち、大学図書館は大学の評価向上に直接関わるような活動に取り組んでいるという点である。また、国立デジタル図書館からは、国家的な知識情報基盤整備の新たな方向性を学ぶことができた。以下、大学図書館の研究支援・学習支援、および、国家的な知識情報基盤整備についてまとめる。

3.1. 研究支援

ソウル大学校図書館および釜山大学校図書館の両図書館で大学評価向上を意識した研究支援の取り組みを調査することができたが、最も特徴的なのは釜山大学校図書館の SCI サービスである。これまでの図書館では、Web of Science など引用文献データベース自体を利用者に提供することはあっても、そのデータベースを自らが使って新たな価値を持つ情報を生み出そうとしなかった。この意味から、SCI サービスは、従来の図書館の枠（学術情報へアクセス可能な状態に環境を整備するという役割）を超えて、一步先に進んだサービスと言える。また、他の研究支援サービスと比較すると、研究戦略をマネジメントする大学中枢部への影響が大きく、研究評価の向上に深く寄与することができる。その結果、大学の中での図書館の立場をより強くする可能性がある。

3.2. 学習支援

韓国の私立大学では、政府による経常費への補助金がなく、歳入の 6 割以上を学生からの授業料に頼っている^[19]。こうした現状のためか、延世大学校の図書館では学生を惹きつける環境の整備に熱心に取り組んでいるように思われた。ユビキタス・ライブラリー、カルチュラル・ライブラリー、コンビニエント・ライブラリーなど、このような学習支援空間の充実が大学評価向上の一翼を担っているという側面を強く感じた。

3.3. 知識情報基盤としての図書館

最後に、国家的な情報インフラとしての図書館政策について言及したい。韓国では知識情報基盤を全ての

国民に提供するという国家理念を実現するため、IT ユビキタス等の環境の整備を急速に進めている。2011 年の図書館政策のうち、関連するものを以下に掲げる^[20]。

- ◆ 公共図書館約 180 館を新たに整備する。（その 6 割以上を地域に根ざした小規模図書館が占める。）
- ◆ 自治体の司書職を 212 名増員する。
- ◆ 農山漁村の小規模図書館に対して電子化資料の閲覧サービスを提供する。
- ◆ 16 の海外学術データベースのナショナルサイトライセンスを確保するとともに、7 か所ある大学図書館外国学術誌支援センターを継続運営する。

注目すべきは、小規模図書館の数を拡充し、司書を増員しようという点である。情報格差を是正するため、1 対 1 のきめ細かい情報リテラシー学習機会を国民に与えようという意図が窺える。こうした小規模公共図書館の十分な配置と国立デジタル図書館の電子インフラによって、韓国が育成を目指す人材像は明確である。すなわち、単に知識を得るだけでなく、さまざまな情報機器を使いこなしつつ、新たなコンテンツを生み出す創造性を備えた人材の育成である。

以上、本稿では我々が訪問・調査した韓国の先端図書館について報告及び分析を行った。韓国では国家発展の戦略として、大学評価システムといった大学改革に加えて、国家的な情報環境整備が推し進められており、その中で図書館が重要な役割を担う存在と見なされていることは間違いない。また図書館自体も自らの評価を上げるだけに留まらず、大学の研究力、学生の学習力、国民の情報スキルの向上を通して、大学自体、国家自体の外部評価を高めることを目指している。これがこれらの図書館の先端性の真の意味である。近年図書館の役割が変化していると言われるが、その変化の方向性は図書館だけを視野において決定すべきものではなく、その図書館が根ざしている大きな母体にいかに貢献できるかということを強烈に意識して決定していく必要がある。

謝辞

本調査にあたって、九州大学情報基盤研究開発センターの岡村耕二先生および附属図書館の皆様には多大なるご支援を賜りました。心より感謝の意を表します。また、今回の訪問を快く受け入れていただいた釜山大学校図書館、ソウル大学校図書館、延世大学校図書館、明知大学校図書館、国立中央図書館、国立デジタル図書館の他、韓国での滞在中お世話になった皆様に厚く御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

参考文献

- [1] 白井京. “韓国の電子図書館法制—「IT 大国」の図書館法と著作権法”. 外国の立法. 2009, (242), p. 87-107.
<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/legis/242/024204.pdf>, (accessed 2011-06-06).
- [2] 田窪直規. “韓国の図書館政策・事情と、歴史・文化財に関するネットワーク情報資源”. 平成 20 年度アジア情報研修. 於:国立国会図書館関西館, 20081121.
http://mavi.ndl.go.jp/asia/tmp/H20_takubo.pdf, (accessed 2011-06-06).
- [3] 金容媛. “特集, 韓国のいま: 韓国における図書館情報政策”. 情報の科学と技術. 2007, 57(1), p. 2-8.
<http://ci.nii.ac.jp/lognavi?name=nels&lang=jp&type=pdf&id=ART0008120645>, (accessed 2011-06-06).
- [4] 金性希. “韓国における大学評価システムの発展過程と現状—情報公示制と自己評価制の導入の意義と課題—”. 大学評価・学位研究. 2010, (11), p.79-96.
http://www.niad.ac.jp/ICSFiles/afildfile/2010/04/27/no9_16_kim_no11_05.pdf, (accessed 2011-06-06).
- [5] 馬越徹. “新段階迎える韓国の大学評価 政府主導の改革は何をめざしているのか”. アルカディア学報 (教育・学術新聞掲載コラム). (734).
<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0374.html>, (accessed 2011-06-03).
- [6] 馬越徹. “韓国大学のアジアでの位置 朝鮮日報社の大学ランキング”. アルカディア学報 (教育・学術新聞掲載コラム). (427).
<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0427.html>, (accessed 2011-06-06).
- [7] Seoul National University. <http://www.useoul.edu/>, (accessed 2011-06-06).
- [8] Pusan Natinal University. <http://english.pusan.ac.kr/>, (accessed 2011-06-06).
- [9] Yonsei University. <http://www.yonsei.ac.kr/eng/>, (accessed 2011-06-06).
- [10] Dibrary. http://foreign.dibrary.net/main.do?lang=ja_JA, (accessed 2011-06-06).
- [11] Seoul National University Library. “Online Article Delivery Service”.
<http://libtest.snu.ac.kr/Eng/Page?EmailCopyService>, (accessed 2011-06-06).
- [12] Dong-Jo Noh, Sung-Jin Kim, In-Ja Ahn, Younghee Noh. “Progress toward Subject Specialization in Korean Academic Libraries”. The Journal of Academic Librarianship, 2011, 37 (2), p. 177-182.
- [13] 홍순영. “학과전담 연구지원 서비스 소개”.
http://library.snu.ac.kr/Files/ResearchSupport_presentation.pdf, (accessed 2011-06-06).
- [14] 野上香織, 西川真樹子. 韓国の大学図書館における利用者サービス実態調査. 2008, 平成 19 年度国際交流推進機構基盤強化経費に基づく教職員等の海外派遣事業実施報告書.
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/50580>, (accessed 2011-06-06).
- [15] 부산대학교 도서관. “부산대학교 연구동향에 관한 통계분석 : 2008 년 SCI 급 등재 논문을 중심으로”. 부산대학교 도서관 기획홍보팀, 2010, 242p.
- [16] 부산대학교 도서관. “SCI 서비스”. <http://sci.pusan.ac.kr>, (accessed 2011-05-21).
- [17] 田中福太郎. “韓国の図書館における電子書籍の提供”. カレントアウェアネス. 2009, (302), CA1701, p. 8-11.
<http://current.ndl.go.jp/ca1701>, (accessed 2011-06-06).
- [18] Mo, Chul-Min. “Beyond equality to better opportunity: new role and function of a national library in a knowledge society”. 76th IFLA General Conference and Assembly. Gothenburg, Sweden, 2010-08-10/15.
<http://www.ifla.org/files/hq/papers/ifla76/123-webber-en.pdf>, (accessed 2011-03-27).
- [19] 水田健輔ほか. “大学の設置形態に関する調査研究 : 韓国における高等教育制度と大学の設置形態”. 国立大学財務・経営センター研究報告. 2010, (18), p. 15-39.
<http://www.zam.go.jp/n00/pdf/ni007002.pdf>, (accessed 2011-06-06).
- [20] 田中福太郎. “韓国, 2011 年度の図書館政策の施行計画を発表”. カレントアウェアネス-E. 2011, (188), E1145.
<http://current.ndl.go.jp/e1145>, (accessed 2011-06-06).